

# 空間を示す格助詞の正誤判断に見られる母語差 -韓国語・中国語・英語母語話者の比較-

蓮池いずみ

愛知学院大学非常勤講師

izumil217@hotmail.com

## 1. はじめに

空間を示す格助詞「に」と「で」は日本語学習者にとって習得の難しい項目であるとされる。本稿では母語に日本語と類似した各体系をもつ韓国語母語話者と、母語で介詞“在”や語順によって空間を指示する中国語母語話者、母語で複数の空間前置詞を使い分ける英語母語話者を対象に「に」と「で」を含む文の文法性判断テストを行い、学習者の助詞の正誤判断の傾向に現われる母語の影響を考察する。

## 2. 先行研究

久保田(1994): 英語を母語とする初級学習者を対象に縦断的習得研究を行った結果、両学習者に共通して、場所を表す用法の「に」と「で」の機能混同の中で、「に」を過剰一般化する傾向が見られた。

迫田(2001): 中級レベルの中国語話者、韓国語話者、その他外国語母語話者に対し助詞の穴埋めテストを行った結果、場所を示す「に」と「で」の使い分けには母語の影響はほとんど見られなかった。また、学習者が「位置を示す名詞(例: 中・前) + に」、「地名・建物を示す名詞(例: 東京・食堂) + で」の組み合わせで助詞を選択する(「名詞+助詞」の「ユニット形成」)傾向が見られた。

岩崎(2001): 米国在住の英語話者を対象に内省インタビューを行った結果、特に初級の学習者に「に」の過剰使用の傾向や、「名詞+助詞」のユニット形成の傾向が見られた。学習者が「に」=in,on,towards、「で」=at,with,byのように英訳に依存している可能性を指摘。

増田(2004): 米国在住の英語話者に対して日本語対面テスト、助詞の穴埋めテスト、内省インタビューを行った結果、初級後半から中級レベルの学生にユニット形成ストラテジーを使用する傾向が見られた。「に」=in,to、「で」=atと直訳的に記憶している学習者もいた。

蓮池(2006): 韓国語、英語、中国語を母語とする学習者グループに助詞選択テストを実施した結果、「学習困難度階層」(Stockwell 他, 1965)からの仮説どおり、母語で複数の前置詞を使い分ける英語話者は中国語話者に比べ習得上有利であること、韓国語母語話者は正の転移により他の2グループより習得が進んでいるなどの可能性が示唆された。

### 3. 方法

#### 3.1 被験者

表 1 被験者のグループ分け

グループ名	L1	日本語能力	人数
HK	韓国語	上位	16
LK	韓国語	下位	16
HC	中国語	上位	16
LC	中国語	下位	16
HE	英語	上位	15
LE	英語	下位	18

#### 3.2 調査方法

・調査は以下の手順で実施した。本稿では 5) の助詞の文法性判断テストの結果を述べる。

- 1) 学習背景アンケート → 2) SPOT → 3) 絵を描写する筆記形式のタスク →  
4) 助詞の穴埋め式選択テスト → 5) 助詞の文法性判断テスト

- ・計 42 問の問題文（格助詞「に」の正用、誤用が各 8 問、「で」の正用、誤用が各 8 問、ダミーとして格助詞「が」の正用、誤用が各 3 問、「を」の正用、誤用が各 2 問）について、下線で示した助詞が正しいか否かを○か×かで答える。答が×の場合は正しいと思う助詞を記入する。
- ・「に」と「で」の正用、誤用の問題計 32 問は、被験者が解答する際に名詞の種類に影響される可能性を検証するために、助詞の直前に来る名詞は位置を示すものとそれ以外のものの二種類を用意し、名詞以外の部分は全く同じ文のペアを正用、誤用ともに 8 組ずつ使用した。

### 4. 結果

#### 4.1 正答数

- ・「に」の正用（図 1）：日本語能力の上位群が下位群よりも高く、母語による差はない（ただし、全体的に高得点）。
- ・「で」の正用（図 2）：韓国語話者の正答数が中国語話者より有意に高く、日本語能力の間には有意差がない。
- ・「に」の誤用（図 3）：母語と日本語能力のどちらも有意差がない（ただし、韓国語話者の正答数が最も高い）。
- ・「で」の誤用（図 4）：日本語能力の上位群が下位群よりも高く、母語による差はない。

→中国語話者に「に」の使用を過剰に容認する傾向が見られ、韓国語話者にはその傾向が見られない。英語話者は両者の中間に位置する。

□ 韓国語母語話者    ▒ 中国語母語話者    ■ 英語母語話者

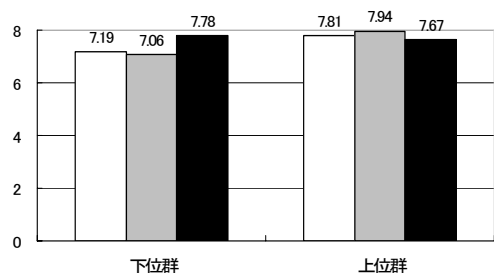


図1 「に」の正用の正答数

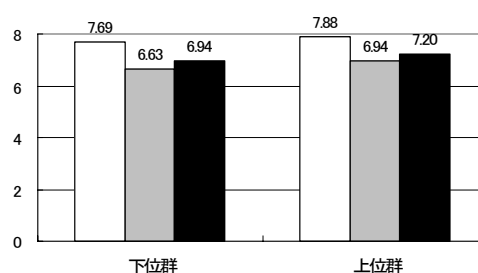


図2 「で」の正用の正答数

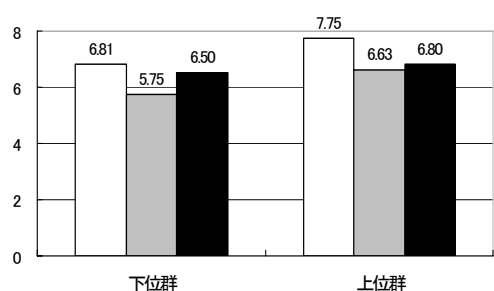


図3 「に」の誤用の正答数

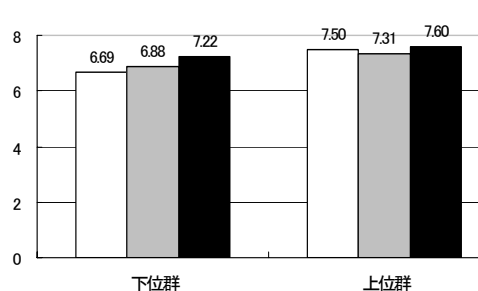


図4 「で」の誤用の正答数

#### 4.2 名詞の種類別正答数

表2 名詞の種類別正答数（正用）

	位置の名詞		その他の名詞	
	に	で	に	で
HK	3.94	3.94	3.88	3.94
(n=16)	(0.25)	(0.25)	(0.34)	(0.25)
LK	3.69	3.88	3.50	3.81
(n=16)	(0.60)	(0.34)	(0.97)	(0.54)
HC	3.94	3.44	4.00	3.50
(n=16)	(0.25)	(0.63)	(0.00)	(0.73)
LC	3.69	3.44	3.38	3.19
(n=16)	(0.60)	(0.73)	(0.72)	(1.11)
HE	3.93	3.33	3.73	3.87
(n=15)	(0.26)	(1.18)	(0.59)	(0.52)
LE	3.94	3.33	3.83	3.61
(n=18)	(0.24)	(0.97)	(0.38)	(0.85)

表3 名詞の種類別正答数（誤用）

	位置の名詞		その他の名詞	
	に	で	に	で
HK	3.81	3.81	3.94	3.69
(n=16)	(0.40)	(0.40)	(0.25)	(0.48)
LK	3.19	3.44	3.63	3.25
(n=16)	(1.05)	(0.89)	(0.62)	(1.00)
HC	3.25	3.81	3.38	3.50
(n=16)	(0.77)	(0.40)	(0.96)	(0.73)
LC	2.81	3.63	2.94	3.25
(n=16)	(1.17)	(0.62)	(1.00)	(0.77)
HE	3.13	4.00	3.67	3.60
(n=15)	(1.36)	(0.00)	(0.62)	(0.51)
LE	2.83	3.72	3.22	3.61
(n=18)	(1.38)	(0.46)	(1.26)	(0.70)

- ・ 正用の正答数：韓国語話者は助詞要因、名詞要因ともに有意な差がない。中国語話者は助詞要因のみが有意で名詞の種類にかかわらず「に」の正答数が「で」の正答数より有意に高い。英語話者は助詞要因及び助詞×名詞の交互作用が有意。

- ・誤用の正答数：韓国語話者は助詞要因、名詞要因ともに有意な差がない。中国語話者は助詞要因のみが有意で名詞の種類にかかわらず「で」の正答数が「に」の正答数より有意に高い。英語話者は助詞要因及び助詞×名詞の交互作用が有意。

→韓国語話者の解答が位置の名詞の存在に影響を受けているとは考えにくい。

→中国語話者は正用、誤用ともに名詞の種類にかかわらず特定の助詞の正答数（正用では「に」、誤用では「で」）が有意に高く、「に」の使用を過剰に容認する傾向が現われている。

→英語話者には「名詞+助詞」のユニット形成の傾向が現われている。被験者が英語の前置詞 on や in と助詞「に」との間に類似性を認めていることが影響している可能性が考えられる。

## 5. おわりに

本稿では学習者の母語における空間表現の違いが日本語の空間表現の正誤判断に直接、あるいは間接的に影響を及ぼす可能性が示された。この結果は同じ被験者に助詞選択テストを実施した蓮池(2006)と共通の傾向を示しており、限られた条件の中で助詞を選択する場面と直観的な文法性判断が求められる場面とでは学習者が類似した傾向を示す可能性が示されたといえる。

付記：本稿は博士学位論文(蓮池, 2008)の一部に加筆修正を行ったものである。

### 参考文献

- 岩崎典子(2001). 「英語母語話者は「で」と「に」をどのように捉えているのか～インタビュー調査から見えてきたこと～」『2001年度日本語教育学会春季大会予稿集』: 61-66.
- 久保田美子(1994). 「第2言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号: 72-85.
- 迫田久美子(2001). 「第2章 学習者の文法処理方法」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子著『日本語学習者の文法習得』大修館書店, pp.25-44.
- 蓮池いずみ(2006). 「場所を示す格助詞「に」と「で」の習得過程における母語の影響について—中国語、英語、韓国語母語話者を対象としたテスト結果分析—」『日本語習得における学習者の母語が及ぼす影響—機能言語学的観点からの研究調査—』平成15年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)(研究課題番号15520330)研究報告書, pp.113-127.
- 増田恭子(2004). 「日本語学習者の場所格「に」と「で」の誤用」『言語文化と日本語教育Ⅲ』くろしお出版, pp.197-214.
- Stockwell,R., J.Bowen, & Martin,J. (1965). *The Grammatical Structures of English and Spanish*. Chicago: University of Chicago Press.